大人の英語の学び方
～認知科学の視点から～

Learning

今井むつみ（いまい・むつみ）

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。1989年、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。1994年ノースウエスタン大学心理学部博士号取得。語彙の習得・学習のメカニズムを研究しているほか、「学び」についての認知科学の研究成果を教育現場での実践に生かすべく活動している。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみ―母語から外国語まで』（ちくま学芸文庫、共著）など。

◆連載を始めるにあたって◆

新年度を迎え、今年こそは「英語をモノにしたい」と決意を新たにされた方も多いことと思う。その中には挫折を繰り返し経験された方もおられるのではないだろうか。英語はなぜ難しいのだろうか？

私自身英語を学習し、アメリカの大学院で学んで認知心理学の博士号を取り、帰国してもずっと英語で論文を書き続けている。英語を書かない日はほとんどない生活を30年ほど続けているが、英語にはいまだに苦労している。英語ネイティブの研究者の書く英語の文章に感嘆するたびに、自分の英語力の弱さをあらためて認識し、落胆してもっと英語ができるようになりたいと思うことの連続である。しかし、英語の学習がつらいと思ったことはない。むしろこんなに続けていても新しい発見、新たな学びがあるということに感動している。英語は（というより言語はすべて）本当に奥が深く、その学びに終わりはない。

世の中の英語学習フィーバーはとどまるところを知らない。英語学習の本も山のように出版されている。英語学習の神話、常識もたくさんあり、それを信じて多くの人が頑張って英語を学んでいるわけだが、多くの人が残念な結果に終わっている現実がある。私は認知心理学の研究者で、主に子どもがどのように母語を覚えていくのかを研究しているのだが、大学で「認知心理学の基礎」のような授業も教えている。その授業では、一般的な（つまり成人の）記憶の仕組みや情報の処理のしかた、問題解決のしかたなど、人の認知、学習のメカニズムについても教えているので、一応の専門知識は持っている。その観点から考えると、なぜ英語学習神話に従って学んでいる人たちが残念な結果に終わっているのか理解できる。

心理学者の仕事はさまざまなことについて常識を疑い、「そもそも」と考えることから始まる。英語学習の神話や常識についても、認知の仕組みから考えるとそもそも理屈に合っていないと思うことがいろいろある。これからの連載で、英語学習の「そもそも」を考えていきたい。

第1回

はじめの「そもそも」
――英語ができるってどういうこと?

英語学習における目標は何か

そもそも不思議なのが、英語ができるとはどういうことなのか、という議論をほとんど聞かないことである。サッカーや野球や水泳などの習い事を子どもにさせるとき、皆が皆、その道のプロになってほしいと思っているわけではないだろう。ただ楽しんでほしい、丈夫な身体をつくってほしい、仲間をつくってほしい、頑張る力を身につけてほしい、など副次的な目的で習い事を始めさせる人も多い。いずれにせよ、プロを目指して訓練をするのと、主に楽しみのために訓練をするのとでは、練習にかける時間やお金のかけ方、練習のしかたも全然違うだろう。人生の中でやりたいことはたくさんあっても時間は限られている。やりたいことに優先順位をつけていくしかない。そんな中でそれぞれのことについて、このレベルを目指したいという自分なりの目標をつくり、それにあった訓練、修業をしていくことは当たり前である。それなのに、なぜ英語学習に関して、「どのレベルを目指すのか」ということを多くの英語学習本が書いていないのか。

日本語母語話者における、さまざまなレベル

子どもの母語の習得を研究しているのでこのことが特に気になるのかもしれない。日本人の子どもが「日本語ができるようになる」というのはどのようなレベルになったときなのだろうか？　2、3歳でも簡単なコミュニケーションは取れる。文法もそんなに間違えない。発音は、例えばサ行やラ行の音がうまく言えなく

1804_bizcom_090-097_CognitiveS.indd 90-91 2018/02/16 16:19

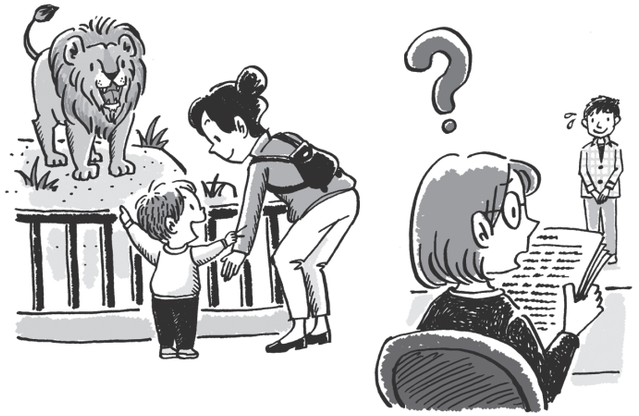
て「らいおん」を「だいおん」と言ってしまったりするものの、それ以外は、立派な「ネイティブの発音」をしている（ちなみに「だいおん」としか発音できなくても、耳は「ら」と「だ」をちゃんと聴き分けている）。つまり2歳児は十分に「日本語ができる」のである。5歳くらいになれば発音は完璧、アクセントもその地方の大人と同じである。語彙もたくさん身につけていて、大人が話しかけることはほぼすべて理解でき、受け答えができる。英語を母語とする5歳児の流暢な話し方に感動し、こういうように話せるようになりたいと思う人もあるだろう。しかし日本語母語の5歳児も立派である。ただし、残念なことに、たいていの5歳児の語彙は日常会話のレベルに限られていて、抽象的な概念のことばは知らない。深い内容の話はできないのである。

高校生、大学生の日本語はどうだろう。日常会話に関しては完璧。流行語を駆使して日本語を話す。彼らの話す日本語は、外国人で日本語を学習する人たちから見るといわゆる「ネイティブの日本語」として、あこがれの対象となる。では彼らの日本語は完璧なのだろうか？　文法は、ほぼ間違えない。彼らの「てにをは」の使い方は違和感ない。しかし、例えば敬語を使うとき、「先生は明日何時に大学に参られますか？」などと言うので、ちょっとびっくりしてしまう。最近水族館で大学生風の男性が彼女に向かって「あそこにペンギン2匹いる」と言うのを聞いた。違和感を覚えたが、もしかしたら最近は「2羽」より「2匹」と言う人のほうが多くなっているのかもしれない。

彼らのレポートはと言えば、話し言葉と書き言葉が混在していて、いわゆる「レポートとしての文章」の体裁をなしていない日本語を書いてくる。一文ごとには書いてあることが理解できるが、レポート全体として何を言いたいのかさっぱりわからない。しかし、もちろんSNSでは（その文脈では）「完璧な（あるいは『適切な』と言うべきかもしれないが）日本語」を駆使する。彼らは日本語を「習得」していることは間違いないが、「習熟」していると言えるだろうか？

外国語として日本語を操る人のレベル

かたや、日本語以外の言語を母語としながら日本語が「できる」人たちのことを考えてみよう。私も日本語ができる外国人を何人も知っているが、彼らの日本語の習熟レベルは人によってさまざまだ。彼らの日本語力は、個人の学習能力の違いというより、日本語を使う必要性によって決まっているように思う。



私のもとの大学の同僚で、英語を教えていた方がいる。この先生は英語を外国語として教える教授法の第一人者、第一級の学者だ。彼女は15年くらい日本で暮らしていたが、日本語力はそこそこだった。挨拶はもちろんできるし、レストランでの注文はでき、買い物もでき、日常生活で必要なコミュニケーション能力はあった。しかし読み書きはできなかったし、つっこんだ内容の話はできなかった。つまり彼女の日本語力は5歳レベルであったと言えよう。これはもちろん彼女の学習能力が足りないためではない。彼女は日本語を5歳以上のレベルで習得する必要性がなく、日本語力を磨こうとする気持ちもなかったのだ。大学では学生とも同僚とも英語で話していて、特に日本語で込み入った話をする必要はなかった。彼女の興味は英語ライティングの教授法にあり、そのテーマについて研究をし、（英語で）講義をし、論文や本を書くことが最優先事項だったので、日本語の勉強に時間を使おうとする気持ちもあまりなかったのだと思う（正確には、気持ちはあったのだが実際にはもっと優先度の高いことにかける時間を削ってまで日本語を勉強するほどの気持ちがなかったので、結果的にはしなかったということだと思う）。このタイプの人は日本で英語を教えるプロフェッショナルに実はとても多い。話は少し脱線するが、これが英語ではなく、別の言語を教える人だと少し違うような気がする。例えば中国

1804_bizcom_090-097_CognitiveS.indd 92-93　2018/02/16 16:19

語や韓国語を母語として日本でこれらの言語を教える人たちは、日本人の同僚とのコミュニケーションは中国語や韓国語でするというわけにいかない。英語でコミュニケーションすることは大学では可能だが、英語も母語ではないので、それなら英語より母語に近い日本語を学んだほうがよいということだろう。実際、彼らの日本語はとても上手である。

日本語を外国語として学習しつつ、日本語や日本文学、日本文化、歴史、経済などを専門に研究する人たちも何人も知っているが、この人たちの日本語力は非常に高い。彼らの多くは高校や大学で日本語の勉強を始めているので、いわゆる「外国人なまり」が目立つ。「てにをは」や「助数詞」はネックになるらしく、間違いも目立つ。しかし、彼らの日本語力の深い知識と文章を書く能力にはいつも驚かされる。話をするときには、外国人なまりもあり、細かい文法の間違いもするが、書くときにはほとんどそのような間違いは見られない。日本人でも知らないことばを知っていて、しかもその使い方が適切だ。普通の現代文を読めるだけではなく、古典の原書（活字でなく、当時の崩し文字で書かれた文書）なども読みこなしてしまう人もいる。

流暢な日本語を駆使してSNSで活躍するが、深い内容について他人が理解できる文章が書けない日本人と、なまりはあるし、「てにをは」は時々間違えるけれど、深い内容でしっかりとした見識を日本語で書くことができる、外国語母語話者。彼らのどちらが日本語力が高いかはあえて言わないことにするが、これは「英語ができるとはどういうことか」問題を考えるうえで考えるべきことだと思う。

どのレベルを目指して英語を学習するのか

まったく同じことは英語学習にも言える。英語を学ぶ目標として、なまりがなく流暢に日常会話ができるが、人の感情について、あるいは世界で起きている出来事や文学や文化についてなど、ちょっと内容が複雑で込み入ってくるとほとんど何も理解できず、話もできない5歳児レベルを目指すのか。それともある程度深い内容の話はでき、文章も書ける（とくにSNS上では）が、ビジネスや外交、研究などの専門的な場面で発言したり、文章を書いたりするには力不足の高校生のレベルを目指すのか。あるいはそれ以上のプロフェッショナルレベルを目指すのか。

「入門ビジネス英語」を受講されている方たちの中には、5歳児レベルはもとより高校生レベルでも足りない、自分に必要なのはプロフェッショナルレベルの英語だと考えている方が多いと思う。実際、これからのグローバル社会で活躍するためにはそれは正しいかもしれない。しかし、自分の最もプライオリティの高い目標のために本当にそれが必要かということは、改めて考えてみることをお勧めする。AIとの競合が心配される世の中で、仕事に必要な知識、スキルは気が遠くなるほどたくさんある。英語ができればそれだけで重宝される時代ではない。その中で、英語プロフェッショナルのレベルを自分は本当に必要としているのか、必要なのだとしたらその時間と労力を本当に捻出するつもりがあるのかどうかをよくよく考えたほうがよい。

ほとんどの人は、自分にはそんなに時間がないから、最短の時間で、最小の努力でプロフェッショナルレベルの英語力を身につける方法を見つけたいと言う。しかし残念ながら日本語母語話者が簡単に、片手間の勉強でプロフェッショナルレベルの英語を習得することはほぼ無理なのは、学習のメカニズムに関するこれまでの研究が示していることだ。こんなことをのっけから言って申し訳ない。ちなみに、特に努力せずに楽に英語をモノにできると謳っている英語塾や商品があったら、それは、2－5歳レベルの英語なら、と思ったほうがよい（5歳児の英語であっても立派なもので、プロフェショナルな内容に踏み込まない定型の会話ですむなら5歳レベルで十分足りるのは、先にも述べたとおりだ）。

ただし、日本人はプロフェッショナルレベルの英語を習得することをあきらめたほうがよいと言いたいわけではない。「最短の時間と最小の努力」で「プロとして通じる英語」が学習できるはずという思い込みをまず捨てるべきだということを言いたいのである。努力は必要で、必要な時間はかける覚悟が必要である。

合理的な英語の学習方法とは?

それでもなお、貴重な時間を英語学習に使う覚悟があるというなら、少なくとも時間を無駄にしない勉強のしかたは考えるべきである。冒頭で述べたように、英語学習に関する世の中の常識には、認知のプロセスの観点から考えるとおかしなことが数多くあり、私の目には多くの英語学習者は貴重な時間を無駄にしてい

1804_bizcom_090-097_CognitiveS.indd 94-95 2018/02/16 16:19

るように見えるのである。拙著『学びとは何か』(岩波新書) を上梓したときに、将棋で永世七冠のタイトルを取られた羽生善治さんが、前書きを書いてくださり、その中で「生涯学習という言葉を耳にする機会が増えました。これから『超』がつく高齢化社会に向かっていく日本において、切実かつ現実的な課題であると思っています。また、子どもの教育に関しても無数の長期間の議論が行われ続けています。多かれ少なかれ人々は日々何かを学び続けている訳ですが、意外にもその方法論には無頓着な事も多いのではないでしょうか。」と述べられている。英語の学習法についての数多(あまた)の本はほとんどの場合、英語学習を特別視し、英語(あるいは外国語) に特化した視点で書かれているが、実は英語の習熟は他のあらゆる分野の習熟と重なるところが多い。例えば将棋で熟達し、羽生さんのような超一流のプロ棋士になるために棋士がたどる過程と、英語をプロフェッショナルレベルで習得することは、認知心理学の観点からするとほぼ同じである。羽生さんはこうも書かれている。「どんな異なったジャンルにおいてもエキスパートになるには洗練された学習は不可欠です。」

この連載では、一般的な心の情報処理、記憶、学習のメカニズムに基づいて考えたとき、どう学習するのが合理的な学習なのか――「簡単に」とか「片手間に」とか「効率的に」ではなくて――を述べていきたい。ただし、つらい苦行を覚悟せよと言いたいわけではない。「楽に習得」というのと「楽しんで習得」は別だ。どの分野でも一流になった人は楽にそうなったわけではなく、楽しみながら努力を重ねた結果そうなったはずである。



認知心理学の観点で私が最も注目したいことは、英語に関して、日本人が陥りやすい言い方を集めた良書はたくさんあり、そういう本を何冊も読み、さまざまな英語表現を頭に叩き込み、英語についての知識やウンチクは積み重ねても、英語がなかなか使いこなせないのはなぜなのか、という問題である。この「英語学習のそもそも」の大問題を認知の仕組みから解説しながら、具体的な英語学習の方法のあれこれについてその合理性を考えていきたい。例えば以下のようなことはよく学生や講演を聞きに来てくださった方から質問を受けるので、随所で触れていきたい。

1 小さいころから英語に触れていれば自然とプロレベルの英語力が身につくのか。

2 英語に必要な4つの技能、つまりリーディング、リスニング、スピーキング、ライティングをどのような比重で学習するのが合理的か。

3 英語を浴びるように聴き、多読すれば、ビジネスで通用するスピーキング、ライティングができるようになるのか。

4 リスニングが苦手な人は、どうすれば英語が「聴こえるように」(つまり耳から入ってくる英語が自然に理解できるように) なるのか。

5 英語の学習には暗記と模倣が有効なのか、それとも暗記は意味がないのか。

6 短期間に集中して勉強するのと、気長に長く勉強するのとどちらが有効か。

次号予告

第2回 英語はなぜ難しいのか
――「知識を持っていること」と「知識を使えること」

1804_bizcom_090-097_CognitiveS.indd 96-97 2018/02/16 16:19